

## 地質学普及書の近代史

### Modern history of geological textbooks for popularization in Japan

地徳 力

Tsutomu Chitoku

穂別町立博物館

Hobetsu Museum, 80-6, Hobetsu, Hokkaido, 054-0211 Japan

(1998年2月18日受付)

#### I はじめに

地質学分野における一般向け普及書について概観した。そのきっかけは、地徳(1997)が概報した「佐々保雄文庫」にある。佐々名誉教授は百数十冊の普及書を所蔵しておられた。これをもとに、これまでに日本国内で出版された一般向け普及書の全容を把握できるか否かを考察した。また、日本の近代史に平行させて、地質学普及書の変遷について、幾つかに区分を試みた。

#### II 普及書の出版数

##### 普及書の内容：

地質学を専門としない一般読者および児童・生徒もしくは、まだ専門を持たない大学生を想定読者とした地質学全般もしくは地質学を構成する学問の一部について紹介した書籍を基本とする。

しかし、明白に一般読者向け・普及を意識したものとはともかく、個々具体的な書籍にあたり、どのような階層を読者として想定したのか判断できないものもある。また、このような読者想定基準も、時代によっていくらかは、変わるものでもあろう。従って、議論する書籍のリストの中には、一般向け普及書というよりは、初学者向け普及書(=教科書)にいれるべきではないかと指摘されるものもあると思われる。しかし今後、「地質学教科書の近代史」なるものを議論することもあろうかとは思いますが、その時には、今回一般向け普及書としたものの一部が再度議論の対象になったとしてもそれ程大きな問題にはならないと思う。従って、普及書と教科書の境界領域にあつては厳密な区別はしないで議論をすすめることとする。

##### 出版数の把握

今回は出版部数、すなわち個々の書籍について出

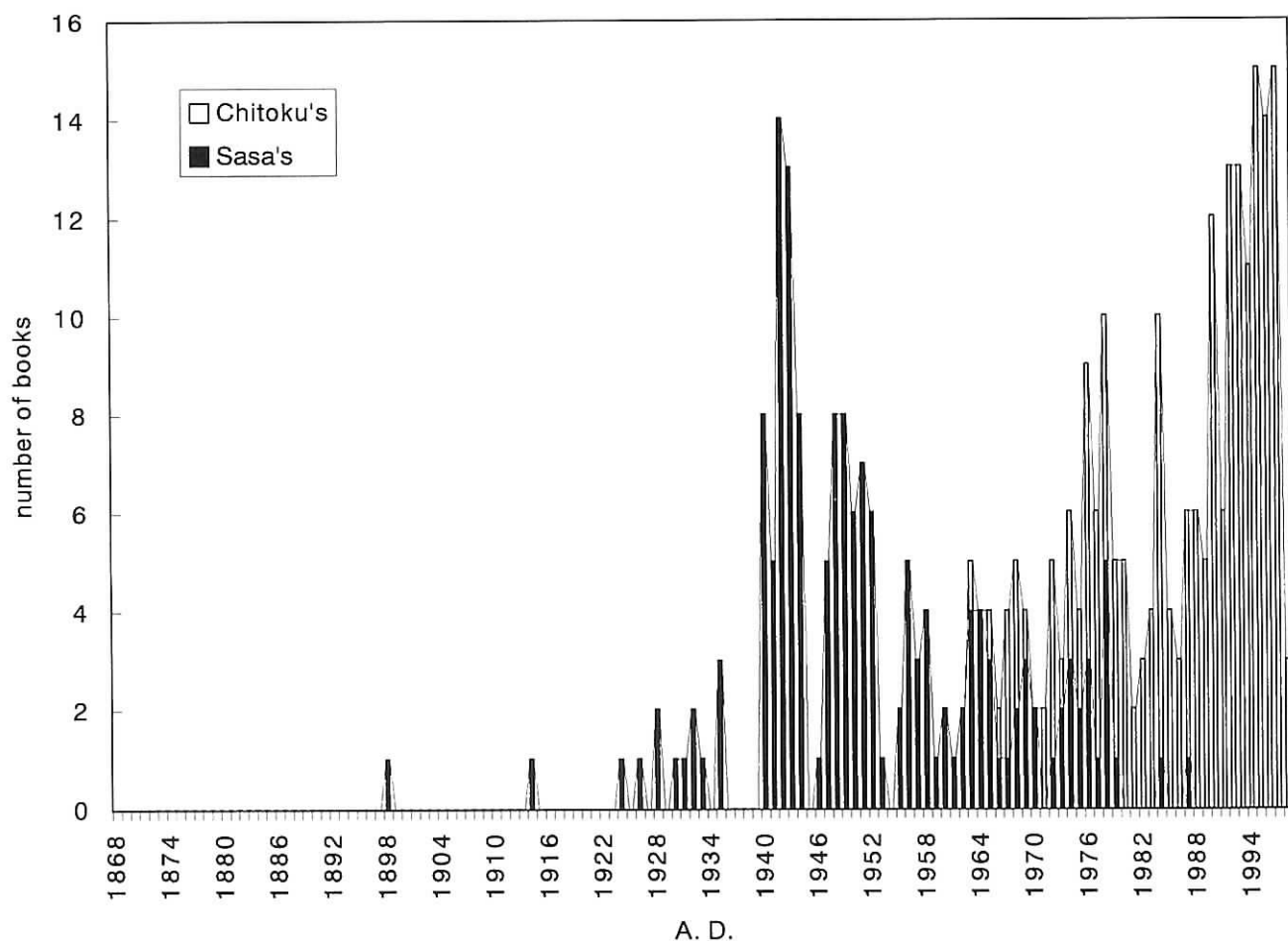
版した部数およびその総和は議論の対象としない。著者名、発行日、本の題名および出版社が同じ書籍を一つとみなし、その数について議論する。版数が違うことが明白なものは別の書籍とみなした。この場合、内容の違いは特に確認していない。海外の著書の訳本の場合、発行日は日本語版のものを採用した。原本の出版年がわかるものについてはそれを、わからないものについては和訳出版年を表記し、訳者・訳出年を添付している。従って、原本が同じでも、訳者・和訳出版年が異なる場合は別の書籍として取り扱った。

##### 出版数の確認

前述の枠組みで、佐々文庫から対象となる書籍164冊を抽出した。ここで、佐々文庫に含まれる書籍は、当然佐々名誉教授が活躍された時代に限定されると思われるので、著者が個人的に所蔵している普及書を加えて、今後の議論を進める。筆者蔵書の分からは佐々文庫との重複分は除外してある。その数は190冊であり、総数354冊で議論する。

354冊の書籍が、これまで日本で出版された普及書数の何割にあたるかは議論できない。これまでに日本で出版された普及書の数が未知だからである。某市の市立図書館に問い合わせたところ、そのような資料は日本には存在しないことが判明した。同時に、日本で一番蔵書が多くかつ整備されているとされているのは国立国会図書館であることを紹介された。国立国会図書館では所蔵目録を書籍及びCD-ROMの形で発行しているが、今回利用できたのは書籍版の「国立国会図書館主題別図書目録(昭和23-43年)」であった。

図書館には残念なことに「普及書」という概念が無い。図書館の立場からはすべての書籍が「普及書」なのだろう。従って「主題別」から該当する書籍を抜き出さなければならない。ところが、目録で



第1図 1986年から1997年までの地質学普及書の出版数

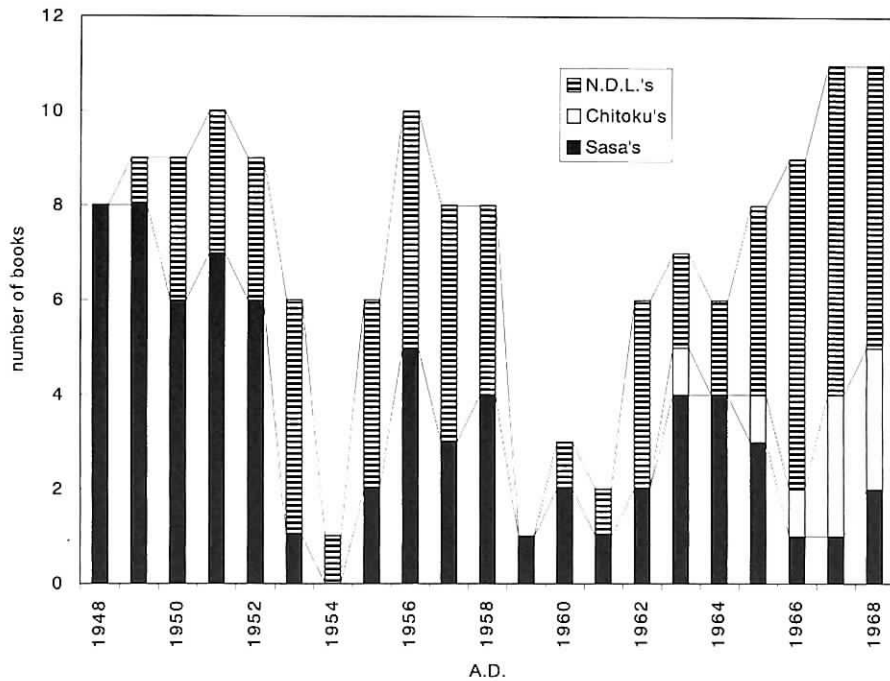
■：佐々文庫に所蔵されている地質学普及書の数。□：筆者所蔵の地質学普及書の数。地徳蔵書からは佐々文庫との重複分は除いてある。

は特別なものを除いて内容が記されていないために、書籍の題名及び出版社で判断することになり、不確かさがつきまとう。さらに、主題別分類には「地質学」という分類単位も無いため、分類単位「450 地学」から必要なものを抽出することになる。なお、分類単位「450 地学」には、現在の常識では地学には含まれない地理学ほかも含まれており、(副分類)古生物学には、最近になって絶滅した現世生物に関する著述も含まれている。一方、生命の起源・発生に関する著述は分類単位「460 生物」の「生命論」に含まれており、特定の生物の系統発生(=進化)に関する著述は、同じ「460 生物」の「進化論」に含まれている。進化をキーワードとする書籍には、「進化論」そのものの解説をテーマとするものと、ある生物分類群の進化の道筋をテーマとするものがある。前者は「460 生物」に含まれていても今回の議論に関しては問題ないが、後者もしくは中間的なものは「古生物」としてあつかい、今

回の議論のデータに含める。

「進化論否定」という書籍が、分類「進化論」に入っていたのには驚いたが、これは分類「宗教」に入れるべきだと思う(出版社名から判断した)と同時に、普及書という性格上つけられた題名によっては、地質学の普及書が全く異なる分類に入れられている可能性も否定できないことに気がついた。しかし、であるからといってすべての主題別分類に目を通すこともできない。従って、以下の議論は以上の不確実性の上に成り立っている。(注：ここでの議論は図書館で用いられている分類法について評価するのが目的ではない。図書館で用いられる分類は、要するに目的の書籍にたどり着ければよいのであって、図書利用以外の広範囲な利用を前提とする必要はないからである。ほかの目的に使おうとするから問題が起きるのであろう。)

上記の前提で抽出した国会図書館所蔵書籍の地質学普及書(1948から1968発行)の数は92点であ



第2図 1948年から1968年までの地質学普及書の出版数

■ および □ については第1図に同じ。▨：国立国会図書館所蔵図書。国立国会図書館蔵書からは佐々文庫および地徳蔵書との重複分は除いてある。

る。同じく、佐々文庫と地徳蔵書の中で1948～1968年までに発行されたものは80点である。点数は類似するが、このうち、佐々文庫+地徳蔵書と国会図書館蔵書とで共通するものは25点しかない。従って、佐々文庫+地徳蔵書+国会図書館蔵書の総和は148点となる。期間的には1948年から1968年、書庫としては佐々文庫と地徳蔵書および国立国会図書館蔵書の三つの中での議論でしかないが、共通するものが17%しか無いというのは意外である。この事から考えられることは、1) 地質学の普及書は意外に多く出版されていて実態がほとんどつかめていない、2) 国立国会図書館は評価されているほど蔵書数が無い、のどちらかもしくは両方である。

前述の議論で、筆者が直接見ることのできる書籍類(佐々文庫と地徳蔵書)と国立国会図書館の蔵書全てを検討しても、地質学普及書の全容は、残念ながらわからないであろうことがわかった。だが一方で、地質学普及書という範囲であれば、佐々文庫と筆者蔵書を合わせれば、日本で一番整備されているという評価のある国立国会図書館並みの書籍数となることも事実であり、この後の議論も全くの無意味ということにもならないであろう。すなわち、佐々文庫と地徳蔵書の中での議論ではあり、必要な情報を網羅しているとはいえないが、ある程度の傾向は示していると思われる。

### 普及書の出版数

佐々文庫および筆者蔵書から佐々文庫との重複分を除いたもので、1868(明治元)年から1997年までの出版数の推移を示した(第1図)。このグラフから次のことがいえる。

- 1) 1940年より前と1940年以後では出版数に格段の差がある。
- 2) 1940-1944の期間は、現代並みの出版数がある。
- 3) 1945、1954年の出版数は0である。

1)と2)については、今後検討できる普及書の数が増えても、この傾向は変わらないであろうと思われる。3)についても、1945年は終戦(敗戦)の年であり、出版数が0なのは十分に理解できる。さて、1954年の出版数が0であることについては、ほとんど理由らしい理由が無い。第2図に示すように、国立国会図書館では1冊の蔵書があり、この前後の年の出版数は、極端に少ないわけではないところから、田中団が小さいことによる偶然がもたらしたものであろう。ただし、0ではないにしても、1954年の出版数が少ないのは事実らしい。また、1959年から1961年にかけて、出版数が1~3/年とその前後の年より少なくなっているが、この理由

も不明である。社会的にはいわゆる“60年安保”の前後であり、普及書を著述する層が大学関係者に多いであろうことと関連があるかもしれない。

### III 普及書出版における年代区分

普及書出版の状況を基準として年代を区分した例はない。従って、ここではまず、関連すると思われる地学教育および科学の近代史で議論された時代区分について概観してみる。

#### 亀井（1969編）「国民のための地学教育」

亀井（1969編）は、「国民のための地学教育」と題しているが、議論の中心は小学校から高等学校までの学校教育における地学教育である。しかし、対象が学校教育であるとはいえ、世相を踏まえた教育史として分析しており、その時代区分は大いに参考になる。ここでは、1960年代末までを以下の5つに分けてある。残念ながら、1969年出版であるから、それ以降については、当然参考にならない。

1. 【明治初期—ほんやく教科書】
2. 【明治中期～後期—国定教科書—】
3. 【第一次世界大戦～昭和初期—大正7年改訂教科書】
4. 【戦時体制下—国民学校—】
5. 【敗戦後の動き】

#### 廣重（1973）「科学の社会史」

廣重 徹は科学史家・歴史学者であり、廣重（1973）の時代区分はかなり詳細である。その区分の基準は政府の科学政策の変遷である。廣重は「科学の（国家への）体制化は、第1次大戦で芽生え、第2次大戦中に本格化し、戦後は全面的な体制編入が進行中である」と主張している。以下に廣重（1973）の時代区分を示す。

1. 【日本における近代科学の基礎工事】
2. 【第一次大戦のインパクト】
3. 【資源局と日本学術振興会】
4. 【総力戦体制へ向けて】
5. 【科学技術新体制】
6. 【科学者・技術者の教育】
7. 【科学動員の終局】
8. 【経済成長と科学】

第一期：敗戦から講和条約発効

第二期：朝鮮戦争特需と輸出

第三期：高度成長政策の時代

9. 【期待から幻滅へ】の時代

#### 中山（1995）「科学技術の戦後史」

中山は科学史家である。科学史家や科学哲学者の間では、「科学」と「技術」は不可分のものであるらしく、この本でもそのように取り扱われているようだ。確かに、「科学」と「技術」を厳密に区分するのは難しいであろう。しかし、筆者の見るところ、この本の中でも「科学」と「技術」は微妙に使い分けられているようであるし、「自然科学（そのもの）の戦後史」についてはまったく記されていない。その主題は「工業（もしくは産業）技術の戦後史」と見ることができ、従って、以下の時代区分は政府の産業政策と日本経済の変遷を基準としていたと考えたほうがよいであろう。以下にその区分を示す。

1. 【占領政策の影響】
2. 【高度成長の奇跡】
3. 【科学優先主義の曲がり角】
4. 【日本型モデルの成立】

#### 普及書出版における年代区分（試案・私案）

これらの時代区分を参考に、実際に普及書に当たって次のように考えた。

1. 【近代地質学基礎工事の時代】～1914
2. 【第1次大戦のインパクトから第2次大戦の敗戦】1914-1945
3. 【敗戦からの復興】1945-1950
4. 【朝鮮戦争特需：急速な経済復興】1950年代
5. 【高度経済成長と矛盾】1960年代
6. 【全体から部分へ】1970-80年代
7. 【多様化】1990年代

#### IV 【近代地質学基礎工事の時代】～1914

亀井（1969編）の【明治初期—ほんやく教科書の時代】および【明治中期～後期—国定教科書—の時代】にあたる。廣重（1973）の【日本における近代科学の基礎工事】の時代と同じ意味である。

近代西洋地質学が導入されたばかりであり、学校教育などは整備されつつあるようであるが、一般への本格的な普及があった様子がない。ここでは、二



つ具体例とその後の時代のものを一つを例にあげる。

#### 佐藤伝蔵 (1898)「地質学」

佐藤伝蔵 (1898) は帝国百科全書の第 18 編として著されたものである。その第 1 版は 1898 (明治 31) 年 11 月 25 日に発行されている。佐々文庫にはその第 14 版 (1911 年 10 月 20 日発行) が収められている。

その序文には「地球に関する学問は、皆その基礎を地質学」においている。しかし、「地質学の書」は、ほとんど存在しない。「文部省」が「地質学なる一科目を、他の自然科学とともに」、「尋常中学校の必修科目とし」たので、尋常中学教師の講義の「参考書として編纂した」と述べている。

#### 神保小虎 (1914)「実用の地質学 (社会文庫)」

神保小虎 (1914) は、大正 3 年 10 月 2 日に発行されている。表題にあるように、神保は「実用」を強調している。その序文でも「本書は地質学と名付けられども地質学者の読む地質学」ではないと述べている。これは、学問としての地質学ではなく、技術としての地質学という意味で、そのために「化石名」・「岩石名」などの専門用語を排除したことが強調されている。普及するための方法論はおくとして、これが現代日本地質学の一般向け普及書として最古のものかもしれない。

#### 渡邊十千郎 (1924)「鉱山物語」

渡邊十千郎 (1924) は、大正 13 年 12 月 10 日に発行されている。発行年としては次の時代に含まれるが、本文中にそれまでの時代の普及書論 (渡邊は「通俗書」としている) が記されており、参考になるのでここに取り上げる。これは K なる人物ともう一人の名称不明の人物が登場する会話形式の普及書である。

一方が「専門の本はむつかし」く、「わかり易い本は少々怪しい」そして「日本では」、「なぜその道の専門家が」(社会) 教育を考えてくれないのだ

ろう？」といえ、他方が学者は「自分の専門の研究」に忙しく、私生活すら二の次にしている。「科学の常識化どころではない」と弁護する。また、一方が「学者の頭だけ進んで、一般国民の知識とあまりかけ離れてしまつては、学問 (全体) が進まんのではないか？」(専門家の知識だけが増えても、一般普及をおろそかにしていれば、やがて専門家になろうとする人材は減っていくという意味ではないかと思われる)、「だから、専門家が素人のために普及書を書いてくれるといい」といえば、他方は「(そのうちに) そういう時も来るだろうが、(今の) 日本では学者が少なく、しかもあまり優遇されていない」と締めくくっている。

この普及書論は現在にも当てはまる部分がある。とても、73 年も前の本であるとは思えない。また、この話から、渡邊十千郎 (1924) 以前はあまり普及書と呼べるものがないことがわかる。

#### V 【第 1 次大戦のインパクトから 第 2 次大戦の敗戦】 1914-1945

亀井 (1969 編) の【第一次世界大戦～昭和初期＝大正 7 年改訂教科書】および【戦時体制下＝国民学校＝】の時代にあたる。廣重 (1973) の【第一次大戦のインパクト】から【科学動員の終局】の時代を含む。

西暦では 1914 年から 1945 年の間になるが、資料としては 1926 年から 1944 年のものしかない。第 3 図に示すように、大部分が東アジア、一部環太平洋の地下資源へと注目させることが目的の普及書であり、これが現代並みの出版数を誇る原因でもある。

燃料協会編 (1931) に始まる、普及書の大量発行時代には、一見「一つの大きな流れ」と「一つの小さな流れ」があるように見える。大きな流れとは、「東亜・環太平洋各地の地下資源」に目を向けさせようというものであり、小さな流れとは「時代・世相を離れて、地球、化石、火山、地史など」に興味を持たせようというものである。

大きな流れの方はどれもほとんど同じ論調なので、内田義信 (1940)「東亜の鉱物資源」および野

注：今回の議論に直接関係ないが、佐藤伝蔵 (1898) では *Plesiosaurus* の訳語に「蛇頭龍」(p. 302) が用いられ、*Clidastis* (*Clidastes* のまちがいであろう) に「蛇龍」(p. 309) の訳語が用いられている。一方、後出する安田健之介 (1931)「鉱物・化石」では、*Plesiosaurus* の訳語に「長頭龍」(p. 69) が用いられている。さらに、安田健之介 (1931) では、現在のいわゆる普及書や新聞などでは「海とかげ龍」などと呼ばれることもある *Mosasaurus*, *Tylosaurus* の訳語に「滄龍」(p. 70) を用いている。「滄」の字は「海原、大海の意」を表し、モササウルス類についてはその二ツチが沿海であるという評価はあるが、訳語として使用するようにしていきたい。

中保一郎(1944)「大東亜の地下資源」を代表とする。

**内田義信(1940)「東亜の鉱物資源」**

内田義信(1940)「東亜の鉱物資源」は昭和15年8月28日に発行されている。同月、「基本国策要綱」において科学の画期的振興と生産の合理化を掲げる。同年12月科学動員協会が設立されている。

その序では「我が国は今や東亜の新秩序建設という大理想実現をめざし、外聖戦の歩武を進むると共に、内国防の強化と生産力の拡充に邁進す。而して、長期建設の建前より生産力拡充は最も重大なる国策にして、その基礎は鉱業に負う所きわめて大なり。由来我が国は資源に乏しく、これを海外に依存するところ甚だ多し。しかるに現今わが国にてはいつそう資源の開発増産が急務となり、満州国五ヶ年計画の拡大、北支開発会社の設立など、すでに大陸の資源開発をめざして邁進す。今や宝庫大陸の資源はわが国により開発されつつあり。また将来ますます進展を見んとしつつあり。国内の資源増産は言うに及ばず、大陸の無限の資源開発に積極的進出を図ることは目下の急務にして、日滿支共存共栄の実を挙げる所以なり。」というが、これでこれらの普及書群の目的は明らかであろう。

**野中保一郎(1944)「大東亜の地下資源」**

野中保一郎(1944)「大東亜の地下資源」は昭和19年3月30日に発行されている。この年の5月には、いわゆる“学徒動員”が始まっている。

論調は内田(1940)とほとんど変わらず、「大東亜の建設」のためには「鉱物資源が」重要であり「日本人は鉱物資源に無関心すぎた。科学する心をよみがえらさねばならぬ」そして「戦争完遂に絶対必須の鉱物資源」を「開発に増産に懸命の努力を」と訴えている。そして「大東亜の地下に千万年の永き眠りに覚めやらぬ地下資源が無尽蔵にある」という。

小さい流れに関しては以下の三つで代表させる。

**早坂一郎(1940)「化石の世界」**

早坂(1940)「化石の世界」は前出の内田(1940)と同じ年の7月1日に第一刷が発行され、同年10月10日に修正第二刷が発行されている。佐々文庫には修正第二刷が収められている。第二次世界大戦

I	II	III	IV	V	VI	VII	著書	発行年月日
							早坂一郎(1926)	1926/7/25
		●					松山基範(1928)	1928/3/28
				●			藤本治義(1928)	1928/4/12
							村田 析(1930)	1930/8/28
●				●			燃料協会(1931編)	1931/4/8
●				●			坂本俊雄(1932)	1932/6/20
				●			藤本治義(1932)	1932/9/1
		●					坪井忠二(1933)	1933/5/15
●				●			大野東雲(1935)	1935/7/5
				●			田中 薫(1935)	1935/8/19
●				●			朝鮮総督府殖産局鉱山課(1935編)	1935/9/18
●				●			コリンズ, W. F.(1940和訳)	1940/1/20
							井出喜三(1940)	1940/3/15
●				●			南洋協会調査部(1940編)	1940/4/22
				●			科学画報編集部(1940編)	1940/5/7
●				●			内田義信(1940)	1940/8/28
●				●			門倉三能(1940)	1940/9/15
				●			早坂一郎(1940)	1940/10/10
●				●			バイン, H. F.(1940和訳)	1940/12/20
				●			坪井忠二(1941)	1941/3/29
							安田健之介(1941)	1941/4/1
			●	●			渡邊萬治郎(1941)	1941/4/10
●							池田謙三(1941)	1941/7/10
●				●			渡邊 光(1941編)	1941/9/30
				●	●		石田周三(1942)	1942/2/20
●				●			渡邊源一郎(1942)	1942/2/25
●				●			大村一蔵(1942)	1942/3/10
				●			ジョンソン, G.(1942和訳)	1942/3/28
				●			黒澤 守(1942)	1942/3/30
				●			松山確郎(1942)	1942/5/1
				●	●		大塚彌之助(1942)	1942/7/19
				●			シャンド, S. J.(1942和訳)	1942/7/25
●				●			太平洋応用鉱物協会(1942編)	1942/9/10
				●	●		ピーターシャム, M. M.(1942和訳a)	1942/9/15
				●	●		ピーターシャム, M. M.(1942和訳b)	1942/9/15
				●	●		秋元 憲(1942)	1942/9/20
				●	●		マクミラン, R.(1942和訳)	1942/11/20
●				●			チツパア, H. L.(1942和訳)	1942/12/15
●				●			笹倉正夫(1943)	1943/2/5
●				●			芳賀 雄(1943)	1943/3/10
				●			安田健之介(1943)	1943/3/20
				●	●		本多登喜夫(1943)	1943/5/15
●				●			橋本 亘(1943)	1943/5/20
●				●			章 鴻鈞(1943)	1943/6/20
							早坂一郎(1943)	1943/8/20
●				●			渡邊萬治郎(1943)	1943/9/10
						●	山口 徹(1943)	1943/9/25
							小野俊一(1943訳)	1943/10/20
●							フリーデンスブルヒ, F.(1943和訳)	1943/11/5
							望月勝海(1943)	1943/11/25
				●			奥津春生(1943)	1943/12/25
●				●			大村一蔵(1944)	1944/2/10
							コワニユ, F.(1944和訳)	1944/2/25
						●	中根良介(1944)	1944/3/25
●				●			野中保一郎(1944)	1944/3/30
●							山根新次(1944)	1944/5/25
●							櫻井欽一(1944)	1944/10/25
●							熊谷忠三郎(1944)	1944/11/15
							ハッケル, E.(1944和訳)	1944/12/10

第3図 1926年から1944年に発行された地質学普及書  
 1926年から1944年に発行された地質学普及書を発行年月日順にならべた。海外の著作は、和訳出版された日を発行年月日とした。I~VIIは以下の概念に該当するものに●印を付けてある。I：東アジアおよび環太平洋地域の地下資源と題材としたもの。II：日本国内の地下資源を題材としたもの。III：「日本列島」もしくは「地球」をキーワードとするもの。IV：児童・生徒を读者として想定しているもの。V：地質学分野の中で特定な話題、もしくは比較的狭い範囲を題材としているもの。VI：生命の発生、進化もしくは系統発生を題材とするもの。VII：DNA、遺伝子、ウイルスを題材とするもの。

は前年9月始まり、翌年6月にはフランスがドイツに降伏している。早坂一郎は当時台北帝国大学教授であった。

早坂(1940)は、その「はしがき」にあるように、「小学校の上級生や中等学校の初年生あたり」を想定読者としている。早坂は「修正第二版へのはしがき」において、「自分で読んでみて、中に少しむつかしいところもある」と感じたが「近ごろの少年少女諸君は、大人が考えているよりはずっとよく勉強しているものと見え、ずいぶん多勢が読んでくれた」と述べている。内容は化石を題材とした地史学のあらましである。

早坂(1940)は、最終章「化石は人類の将来について何を教えるか」において二つの節「天災と生きる力」および「種族の滅亡と人類の覚悟」をおき、後節で以下のように述べている：中生代の「爬虫類は中生代の終わりの頃のものになると」生き延びるために、「お互いに激しく争うようになり、最後には「みんないっしょに滅び」た。「生活力が衰えた種類の間には、兄弟喧嘩が起こりがちであり、最後にはみな「滅亡」してしまうという。

早坂は、ほかの古生物の滅亡についても解説しているが、当時にしても恐竜の滅亡について、特にこの説が有力ということもないであろう。暗に「戦争なんかしていると人類全体が滅びるぞ!」ということをお願いしたのではないかと推測するが、読みすぎであろうか?

最後には、前述したように多くの普及書が出ているのにもかかわらず、「日本には諸君に適した本は見つからない」と断言する。しかし「英語なり、ドイツ語なり、またはフランス語なりを覚えて、本が読めるようになると、面白い本がたくさんある」という。(外国には)たくさんある本が、ほとんど和訳されなかった事情を思うと同時に、外国語を覚えて外国を理解してほしい(そうすれば、戦争も回避できるのではないか)というのが早坂の気持ちでなかったかと思われる。

#### 渡辺萬次郎(1941)「地中の資源」

渡辺(1941)「地中の資源」は昭和16年4月10日に発行されている。この本の前書き「父兄および教師の方に」によると、書き始めたのは昭和2年の秋であるという。この本は、「流感のために、長男と次女を一日のうちに失った」ときに、「なにか児童のためになる、実のあるものを書き上げ」ようと

したもので、「亡き子に話かけるつもりで書いた」と述べている。

ところで、本書の中には本書の宣伝のためのチラシが残されていた。それによると、表題は「地中の資源」ではなく「戦争と地中の資源」となっている。そして、「地中の資源なしでは、現代科学戦に勝つことは出来ません。今、地中の資源全体についてはつきりした知識をもつことは現下日本少年の義務です」とある。

渡辺萬次郎という人がどういう立場の人が、筆者は知らないが、チラシの立場で書いたのであれば「子供を病気で亡くすのと戦争で亡くすのとどちらが辛いのだろうか?」と聞いてみたい気がする。また、もし前書きにあるように「なにか児童のためになる、実のあるものを」書きたいと思って書いたのだとしたら、本人がどのように思っていようが、発行された途端、体制側の道具になってしまう例であるといえよう。

#### マクミラン, R. (1942)「地球誕生物語」

マクミラン, R. (1942)「地球誕生物語」は Macmillan, R. (1925) "The Origin of the World" を 鮫島麟太郎が1942年に訳したものである。原本初版は1914年発行で、和訳されたものは1925年出版、第五回目の改訂版である。日本語版は昭和17年11月20日に発行された。

先に示した小さな流れは児童向けのものである。しかし、この見方が間違いであることは、以下の序文が教えてくれる。

「今回の欧州大戦において、ドイツの迅速果敢なる作戦が至るところに目覚ましき大戦果をあげるをみて、我が国においても今更の如くに科学技術の威力に驚き、俄に科学だ、科学技術だと騒ぎだし、その振興を要望する声が…。それと共に、科学や科学技術に関する出版物の刊行さるるものが著しく増加した」(松井元興、元京都帝国大学総長)とある。これは、まさに第1次世界大戦のインパクトそのものである。児童向けの普及書の中にも、大きな流れと小さな流れがあったのかも知れない。

#### VI 【敗戦からの復興】1945-1950

亀井(1969編)の【敗戦後の動き】の時代にあたる。廣重(1973)の【経済成長と科学】の時代の第一期：敗戦から講和条約発効(1945-1952)の時代にあたる。中山(1995)の【占領政策の影響】の

時代にあたる。

1946年から1950年までに発行された普及書は第4図に示した。【第1次大戦のインパクトから第2次世界大戦の敗戦】の時代とまったく異なるところは、地下資源に関してであるが、「東アジアの地下資源の紹介」がまったく姿を消し、「国内資源の見直し」が主となるところである。それらを次の二つで代表させる。

**和田重之(1946)「砂鉄」**

和田(1946)「砂鉄」は昭和21年4月20日に発行されている。その序文の日付は1945年11月3日であり、日本の敗戦が1945年8月であることを考えると、複雑な気持ちにならざるをえない。なぜならば、この本はわずか2カ月あまりで書かれたものか、もしくはそれ以前より執筆中で、敗戦の騒ぎの中で聖戦完遂から戦災の復興のためにへと方針変更されて書かれたものに違いないからだ。序文には「数年文部省の奨励金交付を受け」ていたとある。科学者は「タフ」である。さて、序文には「我が国は世界有数の砂鉄国であり、国外に鉄鉱石を求めることができない以上、「砂鉄の研究を」と主張している。

**市川信一(1948)「日本の石炭」**

市川信一(1948)「日本の石炭」は昭和23年5月15日に発行されている。著者の言葉として「石炭は日本のもつ地下資源の太宗で」あり、「石炭がなくしては、産業経済は崩壊してしまう」という。炭鉱では「昼でも夜でも採炭が行なわれ」ているので、「炭鉱の実際の状態は是非国民の全部に知っていただきたい。そうすれば炭鉱はどんなに張合いをもってさらに増産を続けるかわからない」と述べている。

和田(1946)とを考えあわせると、つまるところ「鉄の原料も石炭も、地下資源はいっぱいあるんだ」ということになる。もちろん砂鉄を鉄鉱石として実用化する研究や、坑道掘りという危険な作業を実業化する技術力を必要とはするものの、それでは、なぜ、よその国に地下資源を取りに行っただ？ という疑問が湧くが、もちろん、何とかして戦災からの復興をと努力しているこの二人を始め、当時の地質屋に日本全体の戦前の行為について責任を負わせるわけにはいかないであろう。

I	II	III	IV	V	VI	書 名	発行年月日
	●			●		和田重之(1946)	1946/4/20
				●		渡部景隆(1947)	1947/4/15
					●	徳田御穂(1947)	1947/7/10
						岡本要八郎(1947)	1947/10/31
						望月勝海(1947)	1947/11/20
	●			●		木下電城(1947)	1947/12/10
					●	小泉 丹(1948)	1948/4/10
	●			●		市川信一(1948)	1948/5/15
		●				大塚彌之助(1948)	1948/6/20
					●	駒井 卓(1948)	1948/8/20
		●				蔵田延男(1948)	1948/8/30
	●			●		房村信雄(1948)	1948/9/15
						蔵田延男(1948)	1948/12/5
			●			東福寺 鷹(1948)	1948/12/20
						クレイグ, G. S.(1949和訳)	1949/1/15
						小嶋文児(1949)	1949/1/15
				●		日本植物研究学会(1949)	1949/1/15
	●			●		田中正男(1949)	1949/1/15
						井尻正二(1949a)	1949/2/25
		●	●			井尻正二(1949b)	1949/6/1
		●	●			望月勝海(1949)	1949/10/1
			●			原田三夫(1949)	1949/12/10
	●			●		石野武彌(1950)	1950/2/15
					●	三松正夫(1950)	1950/2/20
				●		小原国芳(1950)	1950/2/28
	●			●		福島県鉱業会・福島県地下資源開発振興会(1950)	1950/3/1
						鹿間時夫(1950)	1950/7/1
					●	ガモフ, G.(1950和訳)	1950/7/15

第4図 1946年から1950年に発行された地質学普及書  
1946年から1950年に発行された地質学普及書を発行年月日順にならべた。以下、第3図説明と同じ。

**VII 【朝鮮戦争特需：急速な経済復興】1950年代**

廣重(1973)の【経済成長と科学】の時代の第二期：朝鮮戦争特需と輸出(1950-1959)の時代にあたる。中山(1995)の【高度成長の奇跡】の時代の前半部からなる。

1951年から1959年にかけて発行された普及書のリストは第5図に示した。1950年7月に朝鮮戦争が勃発し、1953年7月に休戦協定が結ばれている。これは、いわゆる“朝鮮戦争特需”を産み出し、敗戦後の日本に急激な経済復興をもたらした。

1950年代に入ると、東アジアの地下資源も国内地下資源の見直しも姿を消す。代わって増えるのが、児童・生徒を想定読者とした本格的な普及書群である。これが増えた直接の原因は、福村書店の「地球の歴史文庫」の発刊にある。これ以前にも、以後にも、児童・生徒対象の普及書はあるので、むしろ本格的・系統的に始まった時期とするべきであろう。「衣食足りて礼節を知る」というが、意味は少し異なるにしても、自由な空気の中で経済的に豊かになったために、児童・生徒対象の本格的・系統的な普及書の需要が増大したのであろう。

ところが、1950年代を最後に1960年代からは、



児童・生徒を想定読者とした普及書は姿を消している。正確に言うと、佐々文庫から姿を消している。実際に1960年代からの、児童・生徒を想定読者とした普及書を調査しないと何ともいえない（これは莫大な数になることが予想されるし、大部分が失われているであろうことも予想される）が、この時期以降、児童・生徒を想定読者とした普及書は、地質学には素人である編集者が企画し、作家が文章を書き、画家が絵を描き、編集者がアレンジするというやり方に変わっていったようだ。地質学の専門家が関わるのはよくて監修という形になる。監修とは岩波国語辞典第5版によると「書籍の著述・編集の監督をすること」とあるが、監修された普及書を読む限りでは、その多くは国語辞典の意味とは違うようである。

児童・生徒を想定読者とした普及書の多くは、わかり易さや面白さが前提とされ、正確さは切り捨てられている。たとえば、「恐竜…」という題名の本でありながら、中には哺乳類型爬虫類を始め水生爬虫類や翼竜なども登場する。ひどいものになると、マンモスなどの絶滅哺乳類もほとんど何の断りもなく紹介されている。瑣末な話題ばかりが強調され、何から引用したのかも全く書いていない。一方で、ほとんどマニアの世界と思われるほど詳細なデータを網羅したものもあるが、ほとんど何の根拠もないような新しい説をも無批判・無責任に取り入れ、現存する古生物学者の考え方を古い体系として否定している。筆者もこの手の本を10数冊所有しているが、大人の鑑賞に耐えるものではない。それゆえ、リストに入れなかったし、佐々文庫にも含まれていないのであろう。

多くの普及書では、読者の知識の発展の為の足がかりは省略されている。図鑑などでも引用文献が省略されているために、読者の学習の発展性がないし、正確な記述かどうか確かめる術もない。これはかなり著名な図鑑などでもそうで、外国の図鑑などを和訳した場合でも、原本には記載されているにもかかわらず、省略されていることが多い。また学名なども、「学名はしばしば変わるので省略する」などということが平気で書かれていたり、学名索引が無かったりもする。怪獣図鑑や妖怪図鑑とほとんど変わらないものになっている様に思われる。

本格的なサイエンス・ライターが登場が期待される。

I	II	III	IV	V	VI	VII	著書	発行年月日
			●	●			今井秀喜(1951)	1951/4/10
			●	●			林 太郎(1951)	1951/10/1
			●	●			井尻正二(1951)	1951/10/20
			●	●			湊 正雄(1951)	1951/11/10
		●	●				牛来正夫(1951)	1951/12/5
			●	●			宇佐美正一郎(1951)	1951/12/5
			●	●			小林國夫(1951)	1951/12/20
		●	●				舟橋三男(1952)	1952/1/5
		●	●				グローモフ、ヴェイ(1952和訳)	1952/5/15
			●	●			小島信夫(1952)	1952/7/25
			●	●			鹿嶋時夫(1952)	1952/7/25
			●	●			池辺展生(1952)	1952/8/5
			●	●			高井冬二(1952)	1952/8/5
							ドフランドル、G.(1953和訳)	1953/5/5
			●	●			三松正夫(1955)	1955/5/15
			●	●			井尻正二(1955)	1955/8/7
				●			オーバーリン、A. I.(1956編和訳)	1956/2/16
		●					レーウィン、ベ・ユ(1956和訳)	1956/3/25
				●			伏見康治ほか(1956)	1956/4/30
				●			望月勝海(1956)	1956/10/15
				●			石川俊夫(1956)	1956/11/30
			●	●			フェルスマン、A.E.(1957和訳)	1957/3/30
				●			山口辰男(1957)	1957/5/10
		●					井尻正二・湊 正雄(1957)	1957/9/25
				●			地学団体研究会(1958編)	1958/5/3
		●					湊 正雄・井尻正二(1958)	1958/5/17
			●				大森昌衛(1958)	1958/9/30
				●			八木貞助・八木健三(1958)	1958/12/1
							横路雅美(1959)	1959/4/15

第5図 1951年から1959年に発行された地質学普及書  
1951年から1959年に発行された地質学普及書を発行年月日順にならべた。以下、第3図説明と同じ。

### VIII 【高度経済成長と矛盾】1960年代

廣重(1973)の【経済成長と科学】の時代の第三期：高度成長政策の時代(1959-1969)にあたる。中山(1995)の【高度成長の奇跡】の時代の後半部からなる。

1960年12月には「所得倍増計画」が決定され、50年代半ばから急成長を続けていた日本経済はさらに膨張する。60年代半ばの不況は、いわゆる“ベトナム戦争特需”によって切り抜けられたとされる。

社会的には経済成長が前面に押し出され、その為か、普及書にも地下資源の話題が散見される。1962年にDDT汚染を告発するR. L. Carsonの“Silent Spring”(邦題:「沈黙の春」)が出版されたが、地質学普及書にこの影響は特にならないうで、1960年代の地質学普及書には大きな特徴はない。実際、“Silent Spring”が影響を与えて、社会的に大きな動きとなるのは1969年からで地質学の側に影響が無いのも当然といえる。ただし、60年代中盤から70年代全体にかけて、「地球」とか「日本列島」とかをキーワードとする普及書がわずかに増えているような様子がある。そして、これらは80年代に入ると、逆に徐々に減っていく。

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	著書	発行年月日
								島村福太郎(1970)	1970/5/1
					●			ダーウィン, C.(1859⇒1971和訳)	1971/2/16
		●						上田誠也(1971)	1971/3/20
								増田孝一郎(1972)	1972/2/10
					●			北川秀男ほか(1972)	1972/3/31
								島 誠(1972)	1972/5/28
								モノー, J.(1971⇒1972和訳)	1972/10/20
								モーガン, E.(1972⇒1972和訳)	1972/10/20
								奥津春生(1973)	1973/1/20
					●			木崎甲子郎(1973)	1973/5/21
								淡 正雄(1973監)	1973/7/15
					●			松本 隆(1974)	1974/3/1
					●			井尻正二・淡 正雄(1974)	1974/3/20
								地学団体研究会仙台支部(1974編)	1974/6/10
								根平邦人(1974)	1974/12/25
					●			塚田松雄(1974)	1974/12/25
								宮城県高等学校理科研究会地学部会(1975編)	1975/4/10
								坂東祐司(1975)	1975/6/30
								藤田至則(1975)	1975/8/1
								ケストラー, A.(1971⇒1975和訳)	1975/12/31
					●			赤松守雄ほか(1976)	1976/2/25
								鈴木正男(1976)	1976/2/25
					●			ヨーク, D.(1976和訳)	1976/4/1
								デズモンド, A. J.(1975⇒1976和訳)	1976/4/5
					●			淡 正雄・井尻正二(1976)	1976/4/27
								今西錦司(1976)	1976/6/30
								井尻正二(1976)	1976/8/1
								淡 正雄(1976監)	1976/9/30
								大森昌衛(1977編)	1977/3/5
								大森昌衛(1977監)	1977/3/30
								前川文夫(1977)	1977/4/1
								淡 正雄(1976監)	1976/9/30
								大森昌衛(1977編)	1977/3/5
								大森昌衛(1977監)	1977/3/30
								前川文夫(1977)	1977/4/1
								井尻正二(1977)	1977/5/13
								シンプソン, G. G.(1967⇒1977和訳)	1977/5/30
								淡 秀雄ほか(1977)	1977/9/25
								歌代 勤ほか(1978)	1978/1/10
								高木貞夫(1978)	1978/3/10
								竹内 均(1978)	1978/5/15
								陶山国男・羽田 忍(1978)	1978/7/1
								木村政昭(1978)	1978/8/25
								地学団体研究会(1978編)	1978/10/25
								地学団体研究会京都支部(1978編)	1978/10/25
								堀田 進(1978編)	1978/11/22
								今井 功・片田正人(1978)	1978/12/1
								今西錦司・吉本隆明(1978)	1978/12/10
								小嶋 稔(1979)	1979/1/22
								浅岡一男(1979)	1979/1/25
								オーバーリン, A. I.(1977⇒1979和訳)	1979/7/24
								小出 仁ほか(1979)	1979/8/1
								蔦 凡(Jiang, F.)(1979和訳)	1979/12/20

第6図 1970年から1979年に発行された地質学普及書  
1970年から1979年に発行された地質学普及書を発行  
年月日順にならべた。以下、第3図説明と同じ。

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	著書	発行年月日
								半谷高久(1980編)	1980/1/28
								宮城一男・高村毅一(1980)	1980/4/1
								西村三郎(1980)	1980/8/1
								小泉 裕(1980)	1980/10/25
								湊 正雄(1980)	1980/10/25
								西村三郎(1981)	1981/4/30
								小原秀雄(1981)	1981/7/20
								河野 長(1982)	1982/1/30
								江原昭善(1982)	1982/7/20
								堀田 進(1982編)	1982/11/10
								上田誠也(1983)	1983/3/29
								ヒッチング, F.(1982⇒1983和訳)	1983/7/15
								江坂輝彌(1983)	1983/12/5
								木田盈四郎(1984)	1984/4/20
								赤木三郎ほか(1984)	1984/5/5
								秋山雅彦(1984)	1984/5/5
								地団研札幌支部(1984編)	1984/5/25
								チャーファス, J.(1982編⇒1984和訳)	1984/5/25
								堀田 進ほか(1984)	1984/8/1
								金子浩昌(1984)	1984/8/1
								埴原和郎(1984)	1984/8/20
								松井 勉ほか(1984編)	1984/8/25
								井本伸廣ほか(1984)	1984/11/5
								井尻正二(1985編)	1985/3/20
								徳岡隆夫・武井日見朔(1985)	1985/4/5
								小林巖雄ほか(1985)	1985/8/25
								酒井潤一ほか(1985)	1985/8/25
								コルバート, E. H.(1977⇒1986和訳)	1986/3/10
								シェファー, B.(1983⇒1986和訳)	1986/7/10
								モンターギユ, A.(1981⇒1986和訳)	1986/11/1
								野尻湖発掘調査団(1986編)	1986/12/7
								チャーリック, A.(1979⇒1987和訳)	1987/1/18
								リーキー, R.(1982⇒1987和訳)	1987/6/25
								アンデル, T. H. v.(1985⇒1987和訳)	1987/7/1
								日本第四紀学会(1987編)	1987/8/27
								岡まりな(1987)	1987/9/10
								岡部三郎(1987)	1987/12/21
								大隅清治(1988)	1988/5/27
								ブロッカー, W. S.(1985⇒1988和訳)	1988/6/20
								平野弘道(1988)	1988/7/20
								敷下 信(1988)	1988/10/20
								シュワルツ, J. H.(1987⇒1989和訳)	1989/2/1
								グールド, S. J.(1981⇒1989和訳)	1989/7/20
								ドゥランジュ, Y.(1984⇒1989和訳)	1989/9/25
								宮下和彦(1989)	1989/10/25
								奥野良之助(1989)	1989/11/20

第7図 1980年から1989年に発行された地質学普及書  
1980年から1989年に発行された地質学普及書を発行  
年月日順にならべた。以下、第3図説明と同じ。

IX 【全体から部分へ】1970-80年代

廣重(1973)の【期待から幻滅へ】の時代に相当する。中山(1995)の【科学優先主義の曲がり角】(1970年代)および【日本型モデルの成立】の時代に相当するが、【日本型モデルの成立】という表現は地質学普及書の歴史にはふさわしくない。

70年代は「汚染」で幕を開けた。そして1973年10月6日に第四次アラブ・イスラエル戦争勃発。これに始まる「オイルショック」を経て、世相はエネルギー中心の時代へと変わっていく。80年代に入

るとキーワードは国際化である。

1970年から1979年までの地質学普及書は第6図に示した。前述した世相を単純に反映しているようには思えない。「日本列島」とか「地球」をキーワードとする書籍群は60年代にかなり類似した傾向を示すが、80年代に入ると徐々に減っていく(第7図)。一方、部分をテーマとした普及書は70年代から増えはじめ、80年代にはほとんどが、部分をテーマとするものとなる。「全体概説から部分詳説の時代へ」といえるであろう。ここで全体概説というのは「地質学」とか「古生物学」の枠組みを

I	II	III	IV	V	VI	VII	著書	発行年月日
				●	●		金子隆一(1994)	1994/1/15
							佐實亦男(1994)	1994/2/1
				●			島村英紀・森谷武男(1994)	1994/3/10
							香原志勢(1994)	1994/3/30
				●			フェイスン, B. M.(1990⇒1994訳)	1994/4/2
				●	●		多田富雄・中村隆二郎(1994編)	1994/5/20
					●		カリー, P.(1994)	1994/6/20
					●		長野 敬(1994a)	1994/11/10
					●		長野 敬(1994b)	1994/12/20
					●		コルバート, E. H.・モラレス, M.(1991⇒1994和訳)	1994/12/20
					●		宮田 隆(1994)	1994/12/20
					●		斎藤清明(1995)	1995/1/25
					●	●	根路銘國昭(1995)	1995/2/28
					●		神谷敏郎(1995)	1995/3/20
					●		科学朝日(1995編)	1995/3/25
				●	●		赤澤 威(1995編)	1995/5/24
				●	●		大塚柳太郎(1995編)	1995/6/15
				●	●		百々幸雄(1995編)	1995/7/15
					●	●	瀬戸口烈司(1995)	1995/8/10
					●		佐伯 修(1995)	1995/8/15
				●	●		米倉伸之(1995編)	1995/8/22
				●	●		大貫良夫(1995編)	1995/9/14
					●		グールド, S. J.(1977⇒1995和訳)	1995/9/20
					●		トマ, H.(1994⇒1995和訳)	1995/9/20
					●	●	ドーキンス, R.(1994⇒1995和訳)	1995/11/6
					●		馬渡峻輔(1995編)	1995/12/25
					●		リーキー, R.(1994⇒1996訳)	1996/2/20
					●		片山一進ほか(1996)	1996/4/1
					●		井尻正二(1996)	1996/4/10
					●		ラウブ, D. M.(1991⇒1996和訳)	1996/4/20
					●	●	尾本恵市(1996)	1996/5/20
					●		富田幸光(1996)	1996/5/22
							地質学研究会全国運営委員会事務局(1996編)	1996/5/31
					●	●	中原英臣・佐川 峻(1989, 1996)	1996/7/31
					●		浜田隆士ほか(1996)	1996/8/1
					●		三木成夫(1996)	1996/8/5
					●		大野 乾(1996)	1996/8/10
					●		グールド, S. J.(1980⇒1996和訳)	1996/8/31
					●		宮城一男(1996)	1996/10/1
					●	●	シュリーヴ, J.(1995⇒1996和訳)	1996/11/30
							ミコッド, R. E.(1995⇒1997和訳)	1997/1/30
							コリンス, H.・ピンチ, T.(1994⇒1997和訳)	1997/2/10
					●	●	中原英臣・佐川 峻(1997)	1997/2/20
					●		多田富雄(1997)	1997/2/25
				●	●		神奈川県立生命の星・地球博物館(1997編)	1997/3/20
					●		モリス, S. C.(1997)	1997/3/20
					●		田代正之(1997a)	1997/4/1
					●		ストリンガー, C.・キャンブル, C.(1993⇒1997和訳)	1997/4/25
							新妻昭夫(1997)	1997/5/5
							諏訪兼位(1997)	1997/6/10
				●			田代正之(1997b)	1997/6/5
					●	●	フォーリー, R.(1995⇒1997和訳)	1997/9/16
							松井孝典(1997)	1997/9/25
					●	●	堀原和郎(1997)	1997/9/30
					●	●	池田清彦(1997)	1997/12/10
				●	●		丸山茂徳・磯崎行雄(1998)	1998/1/20
					●	●	西田治文(1998)	1998/1/25
							都城秋穂(1998)	1998/1/28

## X 多様化【1990年代】

1990年代をどのように評価すべきかわからない。いわゆる「バブル経済」崩壊以前については、経済的な余裕とともに時間的な余裕もできてきた中高年齢層が、博物館等の潜在的なファン層となり、「自然(=地球)」を知りたいという要求を見せはじめた。彼らは、多分、普及書も読んでいることであろう。現在でもその要求を感じ取ることは出来るが、長引く不況は余裕を奪いつつあるようである。

1994年から1998年までの普及書を第8図に示した。「部分詳説」の時代であることは、80年代と変わりが無いように思える。「進化」に関する記述が「地質学の普及書」と判断できるか否かについては前述したが、「進化」に関わる記述の中に「遺伝子・DNA」の記述が具体的になっており、分子生物学などとの絡みで進化が説明されているのも最近の傾向である(第8図のVII)。

最近「エイズ」や「エボラ」の影響で、ウィルスに関する普及書が多く出版される様になってきた。ウィルスと進化を結び付けて解説する人はまだ少ないが、これらの中には、ウィルスが種どころか目や綱のオーダーを越えてDNA(=遺伝子)を運ぶ事が書かれている。人間の遺伝子(=DNA)にも、過去にウィルスに感染したと思われる形跡がいくつもあるとされている。そういえば、細胞内器官の起源も細菌などの感染で説明できるかもしれない。病気(=感染症)のメカニズムは進化論を変えるかもしれない。

これらの真偽については、専門家ではないので、私にはわからない。またそれを議論するのはここでの目的ではない。ここでいえるのは「地質学の普及書」という概念が複雑化、曖昧化しているのがここ10年の傾向ではないかと思われることである。

## XI おわりに

地質学の普及書をもとに、近代を7つの時代に区分した。初期の普及書は明白に時代の影響を受け、その時代のみ有用であるものが多い。第二次世界大戦後は、経済的な余裕と自由な空気の中で、自然を理解させようというものが増えてきた。時代が進むにつれて、普及書の枠組みは全体概説から部分詳説の時代へと変わり、単純に地質学という枠組みの中だけでは処理できないものも増えつつある。

一方、今回議論を行なった書籍類と国立国会図書

第8図 1994年から1998年に発行された地質学普及書  
1994年から1998年に発行された地質学普及書を発行年月日順にならべた。以下、第3図説明と同じ。

示し、部分詳説とは地史ならば「地球全体の地史」ではなく「南極大陸(という特定な地域)の地史」とか、古生物ならば全体を概説するのではなく、「恐竜」や「花粉」などの特定な分野をテーマとする傾向があるということである。

館蔵書は 1948 から 1968 年の話ではあるが、約 17%しか重複するところがなく、地質学の普及書のほとんどは、系統的には保存されていないであろうことが予測された。これも地質学に関する資料であると思うが、残されていないのは残念である。

単に大学並みの研究を行なえることではなく、また、その場限りのイベント館や見世物小屋みたいな普及教育をおこなう場所でもない、広い視野にたった長期的展望を持つ博物館が欲しいものである。

## 引用文献

- 地徳 力, 1997, 穂別町立博物館に寄贈された佐々保雄名誉教授一括資料について. 穂別町立博物館研究報告, no. 13, p. 43-68.
- 廣重 徹, 1973, 科学の社会史=近代日本の科学体制=. 中央公論社, 東京, 345 p.
- 亀井 節夫, 1969 編, 国民のための地学教育. 法律文化社, 京都, 305 p.
- 中山 茂, 1995, 科学技術の戦後史. 岩波書店, 東京, 198 p.



## appendix

今回の議論で使用した書籍類について以下に示す。本来ならば、著者名のアルファベット順、出版年順に示すべきであるが、議論の性質から、出版年月日順に配置する。

## [1898]

佐藤伝蔵, 1898, 地質学. 博文館, 東京, 321頁.

## [1914]

神保小虎, 1914, 実用の地質学. 三省堂, 東京, 210+14+11頁.

## [1924]

渡邊十干郎, 1924, 鉱山物語. 新光社, 東京, 305頁.

## [1926]

早坂一郎, 1926, 地と人. 京文社, 東京, 297頁.

## [1928]

松山基範, 1928, 地球の内部に関する今日の知識. 古今書院, 東京, 40頁.

藤本治義, 1928, 関東の地質. 中興館, 東京, 142頁.

## [1930]

村田 析, 1930, 見やすき為に. 社友会, 東京, 192頁.

## [1931]

燃料協会, 1931編, 燃料問題図説. 科学知識普及会, 東京, 43頁+109図版.

## [1932]

坂本俊雄, 1932, 満州の鉱産資源. 満州文化協会, 大連, 89頁.

藤本治義, 1932, 増訂改版関東の地質. 中興館, 東京, 278+9頁.

## [1933]

坪井忠二, 1933, 地球. 鉄塔書院, 東京, 128頁.

## [1935]

大野東雲, 1935, 樺太地誌. 古今書院, 東京, 209頁.

田中 薫, 1935, 地学写真. 古今書院, 東京, 182+3頁.

朝鮮総督府殖産局鉱山課, 1935編, 朝鮮の有煙炭鉱業. 朝鮮鉱業会, 京城, 73+17頁.

## [1940]

コリンズ, W. F., 1922, 支那の鉱床及鉱業 (西村雄三, 1940訳). 白揚社, 東京, 293頁.

井出喜三, 1940, 最新地質図説. 日本鉱山地質学会, 東京, 7+8+19+19+43+5+6頁.

南洋協会調査部, 1940編, 南洋鉱産資源. 南洋協会, 東京, 679頁.

科学画報編集部, 1940, 金山発見法. 誠文堂新光社, 東京, 235頁.

内田義信, 1940, 東亜の鉱物資源. 昇晷堂, 東京, 393+10頁.

門倉三能, 1940, 北支鉄鉱・硫黄鉄資源. 丸善, 東京, 515頁.

早坂一郎, 1940, 化石の世界. 誠文堂新光社, 東京, 306頁.

ペイン, H. F., 1933, 東亜の鉱産と鉱業 (東亜研究叢書刊行会 1940訳). 生活社, 東京, 350+22+23頁.

## [1941]

坪井忠二, 1941, 地震の話. 岩波書店, 東京, 173頁.

安田健之介, 1941, 鉱物・化石. 研究社, 東京, 242頁.

渡邊萬治郎, 1941, 地中の資源. アルス, 東京, 229頁.

池田謙三, 1941, 地質と人生. 河出書房, 東京, 278頁.

渡邊 光, 1941編, 兵要地誌調査ノ参考, 其の一地学編. 参謀本部, 発行地不明, 205頁.

## [1942]

石田周三, 1942, 生物の進化. 羽田書店, 東京, 224頁.

渡邊源一郎, 1942, 仏印の鉱産資源. 国際日本協会, 東京, 260頁.

大村一蔵, 1942, 南洋の油田. 古今書院, 東京, 146頁.

ジョンソン, G., 1942, 地震と火山の話 (松澤繁子訳). 中央公論社, 東京, 138頁.

黒澤 守, 1942, 樺太の古生物界. 樺太文化振興会, 豊原, 121頁.

松山確郎, 1942, 鉱物・岩石と鉱物資源. 研究社, 東京, 309頁.

大塚彌之助, 1942, 山はどうして出来たか. 岩波書店, 東京, 273+10頁.

シャンド, S. J., 1933, 地球と地質学—アダムソンの旅— (中山一三, 1942訳). 創元社, 東京, 198+6頁.

太平洋応用鉱物協会, 1942編, アルゼンチンの鉱山と鉱物. 金属社, 東京, 48頁.

ピーターシャム, M. M., 1942, 科学絵話地中の宝の話 I 金と石炭 (内山賢次編訳). フタバ書院成光館, 東京, 82+4頁.

ピーターシャム, M. M., 1942, 科学絵話地中の宝の話 II 石油と鉄 (内山賢次編訳). フタバ書院成光館, 東京, 164+2頁.

秋元 憲, 1942, 富士の地質. 田中宗栄堂, 東京, 46頁.

マクミラン, R., 1925, 地球誕生物語 (鮫島麟太郎, 1942訳). 葛城書店, 大阪, 268頁.

チツバア, H. L., 1934, ビルマ鉱産資源 (南洋協会, 1942訳). 日本公論社, 東京, 432頁.

## [1943]

笹倉正夫, 1943, 大東亜地下資源論. 中央公論社, 東京, 128頁.

芳賀 雄, 1943, 支那鉱業史. 電通, 東京, 365頁.

安田健之介, 1943, 化石の研究. 研究社, 東京, 226頁.

本多登喜夫, 1943, 銅物語. 黒髪社, 東京, 202頁.

橋本 巨, 1943, 比律賓群島燃料鉱物の地質. 栗田書店, 東京, 191+47頁, 22図版.

章 瀧汎, 1943, 支那地質学発達史 (前田隆良・熊谷嘉之訳). 人文閣, 東京, 202+11頁.

早坂一郎, 1943, 随筆地質学. 東京書籍株式会社, 台北, 303頁.

渡邊萬治郎, 1943, 鉱物と国運. 誠文堂新光社, 東京, 252頁.

山口 勲, 1943, 生物発達史. 晃文社, 京都, 285頁.

小野俊一, 1943訳, 生命の科学 (第三巻). 平凡社, 東京, 907-1374頁.

フリーデンスブルヒ, F., 1936, 戦争と地下資源 (小玉美雄, 1943訳). 三省堂, 東京, 338頁.

望月勝海, 1943, 大東亜地体構造論. 古今書院, 東京, 200頁.

奥津春生, 1943, 顕微鏡下の化石. 日黒書店, 東京, 215頁.

## [1944]

大村一蔵, 1944, 南洋の地質. 古今書院, 東京, 201頁.

コワニユ, F., 1944, 日本鉱物資源に関する覚書 (石川準吉訳). 羽田書店, 東京, 144頁.

中根良介, 1944, 近代大衆科学読物「石油」. 輝文館, 大阪, 294頁.

- 野中保一郎, 1944, 大東亜の地下資源. 大雅堂, 京都, 218 頁.  
 山根新次, 1944, 南方鉱産資源総論. 日本経国社, 東京, 624+46 頁.  
 櫻井欽一, 1944, 軍需鉱物資源肉眼鑑定法. 柘谷書院, 東京, 171 頁.  
 熊谷忠三郎, 1944, 闘心鉱物. 朝日新聞社, 東京, 268 頁.  
 ヘッケル, E., 1868, 自然創造史(上巻)(石井友幸, 1944 訳). 晴南社, 東京, 360+7 頁.

## [1946]

- 和田重之, 1946, 砂鉄. 日本出版, 大阪, 68 頁.

## [1947]

- 渡部景隆, 1947, 富士の生い立ち. 愛育社, 東京, 145 頁.  
 徳田御稔, 1947, 生物進化論. 日本科学社, 京都, 199+8 頁.  
 岡本要八郎, 1947, 石のいろいろ. 西日本新聞社, 福岡, 89 頁.  
 望月勝海, 1947, 地学・地質学・地理学. 目黒書店, 東京, 124 頁.  
 木下亀城, 1947, 石炭物語. 西日本新聞社, 福岡, 90 頁.

## [1948]

- 小泉 丹, 1948, 進化学の源流. 玄理社, 東京, 286+8 頁.  
 市川信一, 1948, 日本の石炭. 光燃社, 東京, 117 頁.  
 大塚彌之助, 1948, 日本島の生い立ち. 大八州出版, 東京, 133 頁.  
 駒井 卓, 1948, 日本の資料を主とした生物進化学. 培風館, 東京, 326+7 頁.  
 蔵田延男, 1948, 日本の島々の生い立ち. 新日本教育社, 札幌, 118 頁.  
 房村信雄, 1948, 石炭の話. 開隆堂出版, 東京, 234 頁.  
 蔵田延男, 1948, 地学入門. 光風館, 東京, 209 頁.  
 東福寺 篤, 1948, 石ころ—私達の住む大地の科学—. 目黒書店, 東京, 188 頁.

## [1949]

- クレイヴ, G. S., 1949, 科学の教室(久保ほか訳). 時事通信社, 東京, 337+238+299 頁.  
 小嶋文児, 1949, 岩石の成因. 日本出版社, 大阪, 109 頁.  
 日本植物研究学会, 1949, コマロフ「植物の起源」入門. 岩崎書店, 東京, 232 頁.  
 田中正男, 1949, 鉱山の話. 開隆堂出版, 東京, 185 頁.  
 井尻正二, 1949, 古生物学論. 平凡社, 東京, 311 頁.  
 井尻正二, 1949, 地質の教室・これからの地球はどうなるか. 新興出版社, 東京, 166 頁.  
 望月勝海, 1949, 地球物語. 少年文化社, 東京, 197 頁.  
 原田三夫, 1949, 子供の地質学. 誠文堂新光社, 東京, 166 頁.

## [1950]

- 石野武彌, 1950, 石油掘る話. 富山房, 東京, 248 頁.  
 三松正夫, 1950, 昭和新山の噴出. 昭和新山研究会, 壮瞥, 32 頁.  
 小原国芳, 1950, 玉川学習大事典地質鉱物編. 玉川大学出版部, 東京, 580 頁.  
 福島県鉱業会・福島県地下資源開発振興会, 1950, 福島県の地下資源. 福島県鉱業会・福島県地下資源開発振興会, 福島, 136 頁.  
 鹿間時夫, 1950, 古生物譚・後編. 日本鉱物趣味の会, 京都, 267 頁.  
 ガモフ, G., 1941, 地球の伝記(内山賢次, 1950 訳). 白揚社, 東京, 332 頁.

## [1951]

- 今井秀喜, 1951, 地下の宝庫. 三省堂出版, 東京, 236+8 頁.  
 林 太郎, 1951, 石油と石炭. 三省堂出版, 東京, 206+8 頁.  
 井尻正二, 1951, マンモス象とその仲間. 福村書店, 東京, 124 頁.  
 湊 正雄, 1951, 湖の一生. 福村書店, 東京, 116 頁.  
 牛来正夫, 1951, 日本列島のおいたち. 福村書店, 東京, 101+2 頁.  
 宇佐美正一郎, 1951, 大むかしの植物. 福村書店, 東京, 114+2 頁.  
 小林國夫, 1951, 日本アルプス. 福村書店, 東京, 127+2 頁.

## [1952]

- 舟橋三男, 1952, 地球の誕生. 福村書店, 東京, 128 頁.  
 グローモフ, ヴェ・イ, 1952, 百万年前の地球. 福村書店, 東京, 108 頁.  
 小島信夫, 1952, 植物の化石. 福村書店, 東京, 122 頁.  
 鹿間時夫, 1952, 世界の龍. 福村書店, 東京, 138 頁.  
 池辺展生, 1952, 貝の化石. 福村書店, 東京, 122 頁.  
 高井冬二, 1952, 魚のおいたち. 福村書店, 東京, 130 頁.

## [1953]

- ドフランドル, G., 1953, 生物から岩石ができる話(菅原健・田中元治訳). 白水社, 東京, 133+iii 頁.

## [1955]

- 三松正夫, 1955, 昭和新山の誕生. 三松つる, 壮瞥, 24 頁.  
 井尻正二, 1955, 恐竜王国. 小山書店, 東京, 189 頁.

## [1956]

- オパーリン, A. I., 1956, 生命の起源と生化学(江上不二夫編). 岩波書店, 東京, 216 頁.  
 レーヴィン, ベ・ユ, 1955, 地球の起源(民科地団研, 1956 訳). 岩崎書店, 東京, 112 頁.  
 伏見康治ほか, 1956, 進化—その必然と偶然—. 中山書店, 東京, 234+16 頁.  
 望月勝海, 1956, 新版地質学入門. 古今書院, 東京, 211+18 頁.  
 石川俊夫, 1956, 北の火山. 楡書房, 札幌, 64 頁.

## [1957]

- フェルスマン, A. E., 1951, おもしろい地球の科学(上)(地学団体研究会, 1957 訳). 理論社, 東京, 283 頁.  
 山口辰男, 1957, 石油読本. 春秋社, 東京, 167+10 頁.  
 井尻正二・湊 正雄, 1957, 地球の歴史. 岩波書店, 東京, 217+2 頁.

## [1958]

- 地学団体研究会, 1958 編, 化石採集の手引—関東編—. 地学団体研究会, 東京, 193 頁.  
 湊 正雄・井尻正二, 1958, 日本列島. 岩波書店, 東京, 206 頁.  
 大森昌衛, 1958, 地球の歴史. あかね書房, 東京, 254 頁.  
 八木貞助・八木健三, 1958, 上水内郡地質誌. 長野県上水内教育会, 上水内, 480 頁.

## [1959]

- 横路雅美, 1959, 私の地学. 横路雅美, 札幌, 206 頁.

## [1960]

- 直良信夫, 1960, 日本の誕生—原始カオス期の歴史—. 光文社, 東京, 248 頁.  
 鹿間時夫, 1960, 石になったものの記録—化石の話—. 角川書店, 東京, 238 頁.

## [1961]

国府谷盛明, 1961, 大雪山の生いたち. 層雲峡観光協会, 上川, 24頁.

## [1962]

ハンソン, E. D., 1962, 動物の分類と進化 (八杉竜一, 1962 訳). 岩波書店, 東京, 146頁.

井尻正二, 1962, 文明の中の未開=人間はどこまで進化したか=. 三一書房, 東京, 277頁.

## [1963]

宮崎政三・高橋彦治, 1963, トンネル技術者のための地質学. 山海堂, 東京, 134頁.

大町北一郎, 1963, 日本の鉄鉱石資源. 実業公報社, 東京, 172頁.

ダーウィン, C., 1859, 種の起源 (八杉竜一, 1963 訳). 岩波書店, 東京, 271+287+288頁.

井尻正二・新堀友行, 1963 編, 地学入門. 築地書館, 東京, 302頁.

徳永重元, 1963, 花粉のゆくえ. 実業公報社, 東京, 218頁.

## [1964]

竹内 均・上田誠也, 1964, 地球の科学=大陸は移動する=. 日本放送協会, 東京, 252頁.

北海道地学教育連絡会, 1964, 北海道の化石=付古人骨・石器・土器=. 北海道地学教育連絡会, 札幌, 163頁.

蔵田延男, 1964, 地球をあなたの身近なものに. 地学出版社, 東京, 154頁.

中村久由, 1964, 地熱の開発と利用. 地学出版社, 東京, 151頁.

## [1965]

諏訪 彰, 1965, 火を噴く日本列島=日本の火山を診断する=. 講談社, 東京, 221頁.

竹内 均・都城秋穂, 1965, 地球の歴史. 日本放送協会, 東京, 235頁.

松野久也, 1965, 写真地質. 実業公報社, 東京, 284頁.

ペロウソフ, ヴェ・ヴェ, 1963, 地球の構造と発達 (多井義郎, 1965 訳). 明治図書出版株式会社, 東京, 161頁.

## [1966]

湊 正雄・井尻正二, 1966, 日本列島 (第二版). 岩波書店, 東京, 221頁+2 図版+1 表.

岡崎由夫, 1966, 釧路の地質. 釧路市, 釧路, 326頁+10 図版.

## [1967]

大森昌衛, 1967, よみがえる化石=石にきざまれた生物の発達史. 講談社, 東京, 246頁.

亀井節夫, 1967, 日本に象がいたころ. 岩波書店, 東京, 197頁.

坪井忠二, 1967, 新・地震の話. 岩波書店, 東京, 211頁.

酒井軍治郎ほか, 1967, 青森県の地質と地下資源. 陸奥新報社, 弘前, 281頁.

## [1968]

井尻正二, 1968, 化石. 岩波書店, 東京, 223+3頁.

ダーウィン, C., 1859, 種の起源 (八杉竜一, 1968 訳). 岩波書店, 東京, 271+287+288頁.

ハクスリー, J., 19xx, 進化とはなにか=20億年の謎を探る (長野 敬・鈴木善次, 1968 訳). 講談社, 東京, 274頁.

福富忠男, 1968, 建設と岩石. ラティス, 東京, 156頁.

小島郁生, 1968, 恐竜の時代=古生物学入門. 社会思想社, 東京, 279頁.

## [1969]

亀井節夫, 1969 編, 国民のための地学教育. 法律文化社, 京都, 305頁.

竹内 均・島津康男, 1969, 現代地球科学=自然のシステム工学=. 筑摩書房, 東京, 262+5頁.

八杉龍一, 1969, 進化論の歴史. 岩波書店, 東京, 192頁.

モリス, D., 1967, 裸のサル=動物学的人間像=(日高敏隆, 1969 訳). 河出書房新社, 東京, 240+10頁.

## [1970]

早坂一郎, 1970, 角礫岩のころ. 川島書店, 東京, 255頁.

島村福太郎, 1970, 地学のあゆみ=理科教育のための科学史=. 第一法規出版社, 東京, 305頁.

## [1971]

ダーウィン, C., 1859, 種の起源 (八杉竜一, 1971 訳). 岩波書店, 東京, 271+287+288頁.

上田誠也, 1971, 新しい地球観. 岩波書店, 東京, 197頁.

## [1972]

増田孝一郎, 1972, 化石とその周辺. 評論社, 東京, 242頁.

北川芳男ほか, 1972, 忠類産ナウマン象=その発見から復原まで=. 北海道開拓記念館, 札幌, 40頁.

島 誠, 1972, 元素から見た地球=その過去と未来のドラマ=. 講談社, 東京, 228+2頁.

モノー, J., 1971, 偶然と必然 (渡辺格・村上光彦, 1972 訳). みすず書房, 東京, 236頁.

モーガン, E., 1972, 女の由来 (中山善之, 1972 訳). 二見書房, 東京, 313頁.

## [1973]

奥津春生, 1973, 大仙台圏の地盤・地下水. 宝文堂, 仙台, 319頁.

木崎甲子郎, 1973, 南極大陸の歴史を探る. 岩波書店, 東京, 209頁.

湊 正雄, 1973 監, [目でみる]日本列島のおいたち. 築地書館, 東京, 30 pls.

## [1974]

松本 隆, 1974, 地球の年輪. 大日本図書, 東京, 185頁.

井尻正二・湊 正雄, 1974, 地球の歴史(第二版). 岩波書店, 東京, 203+5頁.

地学団体研究会仙台支部, 1974 編, 新版仙台の地学. 地学団体研究会仙台支部, 仙台, 152頁.

塚田松雄, 1974, 花粉は語る=人間と植生の歴史=. 岩波書店, 東京, 231頁.

根平邦人, 1974, 進化をどう理解するか. 共立出版, 東京, 191+3+5頁.

## [1975]

宮城県高等学校理科学研究会地学部会, 1975 編, 宮城県の地質案内. 宝文堂出版, 仙台, 159頁.

坂東祐司, 1975, 種の絶滅と進化=恐竜はなぜ滅んだのか. 講談社, 東京, 238頁.

藤田至則, 1975, 地質への招待=頭とハンマーで=. 玉川大学出版部, 東京, 228頁.

ケストラー, A., 1971, サンバガエルの謎 (石田敏子, 1975 訳). サイマル出版会, 東京, 241頁.

## [1976]

赤松守雄ほか, 1976, 北海道のアンモナイト. 北海道開拓記

- 念館, 札幌, 47 頁.
- 鈴木正男, 1976, 過去をさぐる科学=年代測定法のすべて=. 講談社, 東京, 234 頁.
- ヨーフ, D., 1976, 新しい地球像(日本地学教育学会誌). 秀潤社, 東京, 173 頁.
- デズモンド, A. J., 1975, 大恐竜時代=1億年前の地球(加藤秀, 1976 訳). 二見書房, 東京, 317 頁.
- 湊 正雄・井尻正二, 1976, 日本列島(第三版). 岩波書店, 東京, 209 頁+4 図版+3 頁.
- 今西錦司, 1976, 進化とはなにか. 講談社, 東京, 220 頁.
- 井尻正二, 1976, 独創の方法. 玉川大学出版部, 東京, 207 頁.
- 金子史郎, 1976, 地形をさぐる. 古今書院, 東京, 292 頁.
- 湊 正雄, 1976 監, 日本列島の歴史=新地学教育講座=. 東海大学出版会, 東京, 178 頁.
- [1977]
- 大森昌衛, 1977 編, 地球の誕生, 現代の地球観. 合同出版, 東京, 246 頁.
- 大森昌衛, 1977 監, 地層と化石=新地学教育講座=. 東海大学出版会, 東京, 218 頁.
- 前川文夫, 1977, 日本の植物区系. 玉川大学出版部, 東京, 178 頁.
- 井尻正二, 1977, 新版科学論(上・下). 大月書店, 東京, 241 頁, 213 頁.
- シンブソン, G. G., 1967, 進化の意味(平沢一夫・鈴木邦雄, 1977 訳). 草思社, 東京, 376 頁.
- 湊 秀雄・西川 治・磯田 浩・浜田隆士・横山 正, 1977, 地球人の環境. 東京大学出版会, 東京, 224 頁.
- [1978]
- 歌代 勤・清水大吉郎・高橋正夫, 1978, 地学の語源をさぐる. 東京書籍, 東京, 195 頁.
- 高木貞夫, 1978, 動物の分類=伝統的アプローチ. 東京大学出版会, 東京, 126 頁.
- 竹内 均, 1978, 燃える島=マントル対流の現場から=. 筑摩書房, 東京, 157 頁.
- 陶山国男・羽田 忍, 1978, 現場技術者のためのやさしい地質学. 築地書館, 東京, 130 頁.
- 木村政昭, 1978, 噴火と大地震. 東京大学出版会, 東京, 187 頁.
- 地学団体研究会, 1978, みんなで科学を=地団研 30 年のあゆみ=. 大月書店, 東京, 249 頁.
- 地学団体研究会京都支部, 1978 編, 京都地学ガイド=現地に見る京都五億年の旅. 地学団体研究会, 京都, 206 頁.
- 堀田 進, 1978 編, 動物園で学ぶ進化. 東海大学出版会, 東京, 242 頁.
- 今井 功・片田正人, 1978, 地球科学の歩み. 共立出版, 東京, 206+vi+xiii 頁.
- 今西錦司・吉本隆明, 1978, ダーウィンを超えて=今西進化論講義. 朝日出版社, 東京, 171 頁.
- [1979]
- 小嶋 稔, 1979, 地球史. 岩波書店, 東京, 195 頁.
- 浅間一男, 1979, 生物はなぜ進化したか=現代進化論の盲点をつく=. 講談社, 東京, 258 頁.
- オパーリン, A. I., 1977, 物質→生命→理性(石本真, 1979 訳). 岩波書店, 東京, 245 頁.
- 小出 仁・山崎晴雄・加藤慎一, 1979, 地震と活断層の本. 国際地学協会, 東京, 123 頁.
- 蔭 凡, 1979, 海城地震=予知成功のレポート(力武常次・杉 充胤訳). 共立出版, 東京, 149 頁.
- [1980]
- 半谷高久, 1980 編, 陸水学への招待. 東海大学出版会, 東京, 219+iii 頁.
- 宮城一男・高村毅一, 1980, 宮沢賢治と植物の世界. 築地書館, 東京, 193 頁.
- 西村三郎, 1980, 日本海の成立(改訂版)=生物地理学からのアプローチ=. 築地書館, 東京, 228 頁.
- 小泉 格, 1980, 海底に探る地球の歴史. 東京大学出版会, 東京, 108 頁.
- 湊 正雄, 1980, 変動する海水面. 東海大学出版会, 東京, 197 頁.
- [1981]
- 西村三郎, 1981, 地球の海と生命=海洋生物地理学序説=. 海鳴社, 東京, 284 頁.
- 小原秀雄, 1981, 生物が一日一種消えてゆく=滅びの動物学. 講談社, 東京, 234+vi 頁.
- [1982]
- 河野 長, 岩石磁気学入門. 東京大学出版会, 東京, 146 頁.
- 江原昭善, 1982, 進化のなかの人体. 講談社, 東京, 188 頁.
- 堀田 進, 1982 編, 続・動物園で学ぶ進化. 東海大学出版会, 東京, 178+14 頁.
- [1983]
- 上田誠也, 1983, 生きている地球. 岩波書店, 東京, 80 頁.
- ヒッチング, F., 1982, キリンの首(樋口広芳・渡辺政隆, 1983 訳). 平凡社, 東京, 347 頁.
- 江坂輝彌, 1983, 化石の知識=貝塚の貝=. 東京美術, 東京, 161 頁.
- [1984]
- 木田盈四郎, 1984, 遺伝を考えた人間の話=人類遺伝学入門. 講談社, 東京, 235 頁.
- 赤木三郎・清水大吉郎・中井 均, 1984, 無脊椎動物群の海=オルドビス紀・シルル紀=. 共立出版, 東京, 131 頁.
- 秋山雅彦, 1984, 生命の誕生=先カンブリア時代・カンブリア紀=. 共立出版, 東京, 148+iii 頁.
- 地学団体研究会札幌支部, 1984 編, 地質案内札幌の自然を歩く[第2版]. 北海道大学図書刊行会, 札幌, 265 頁.
- チャーファス, J., 1982 編, 生物の進化=最近の話題(松永俊男・野田春彦・岸由二, 1984 訳). 培風館, 東京, 262 頁.
- 堀田 進・後藤仁敏・中井 均, 1984, 魚類の時代=デボン紀=. 共立出版, 東京, 120 頁.
- 金子浩昌, 1984, 貝塚の獣骨の知識=人と動物とのかかわり. 東京美術, 東京, 173 頁.
- 植原和郎, 1984, 新しい人類進化学=人の過去・現在・未来をさぐる. 講談社, 東京, 223 頁.
- 松井 愈・吉崎昌一・植原和郎, 1984 編, 北海道創世記. 北海道新聞社, 札幌, 197 頁.
- 井本信廣・清水大吉郎・武蔵野寛, 1984, 大森林の時代=石炭紀・二畳紀=. 共立出版, 東京, 138 頁.
- [1985]
- 井尻正二, 1985 編, 氷雪に甦り氷雪に消ゆ. 築地書館, 東京, 155 頁.
- 徳岡隆夫・武井硯朔, 1985, 恐竜の王国=三畳紀・ジュラ紀・白亜紀=. 共立出版, 東京, 159 頁.



小林巖雄・吉村尚久・吉谷昭彦・小沢幸重, 1985, 哺乳類の時代=第三紀=. 共立出版, 125頁.

酒井潤一・熊井久雄・中村由克, 1985, 氷河時代と人類=第四紀=. 共立出版, 東京, 153頁.

## [1986]

コルバート, E. H., 1977, 恐竜はどう暮らしていたか(長谷川善和, 1986 訳). どうぶつ社, 東京, 206頁.

シエファー, B., 1983, 進化の博物学=めくるめく生物の多様性=(渡辺正隆・榊原充隆, 1986 訳). 平河出版社, 東京, 228頁.

モンターギュ, A., 1981, ネオテニー(尾本恵市・越智典子, 1986 訳). どうぶつ社, 東京, 335頁.

野尻湖発掘調査団, 1986, 一万人の野尻湖発掘=たのしい仲間づくり=. 築地書館, 東京, 206頁.

## [1987]

チャーリツグ, A., 1979, 恐竜は生きている=新しい恐竜の見方(長谷川善和・真鍋 真, 1987 訳). どうぶつ社, 東京, 205頁.

リーキー, R., 1982, 人類の起源(日本語版, 1987 訳). 新潮社, 東京, 235頁.

アンデル, T. H. v., 1985, さまよえる大陸と海の系譜=これからの地球観=(卯田 強, 1987 訳). 築地書館, 東京, 326頁.

日本第四紀学会, 1987 編, 百年・千年・万年後の日本の自然と人類=第四紀研究にもとづく将来予測=. 古今書院, 東京, 231頁.

団 まりな, 1987, 動物の系統と個体発生. 東京大学出版会, 東京, 137頁.

岡部三郎, 1987, 札幌の自然(地学編). 富士書院, 札幌, 103頁.

## [1988]

大隅清治, 1988, クジラは昔陸を歩いていた=史上最大の動物の神秘. PHP 研究所, 京都, 252頁.

ブロッカー, W. S., 1985, なぜ地球は人が住める星になったか?(斎藤馨児, 1988 訳). 講談社, 東京, 309+VII+(4)頁.

平野弘道, 1988, 恐竜はなぜ滅んだか. 講談社, 東京, 214頁.

太古からのメッセージ編集委員, 1988, 太古からのメッセージ=いわき産化石ノート. いわき地域学会出版部, いわき, 169頁.

鏡下 信, 1988, 巨大分子雲と恐竜絶滅. 地人書館, 東京, 176頁.

グールド, S. J., 1983, ニワトリの歯(渡辺政隆・三中信宏, 1988 訳). 早川書房, 東京, 296+310頁.

## [1989]

シュワルツ, J. H., 1987, オランウータンと人類の起源(渡辺毅, 1989 訳). 河出書房新社, 東京, 397+xiv頁.

グールド, S. J., 1981, 人間の割りまちがい(鈴木善次・森脇靖子, 1989 訳). 河出書房新社, 東京, 444+XXII頁.

ドウランジュ, Y., 1984, ラマルク伝=忘れられた進化論の先駆者=(ベカエール直美, 1989 訳). 平凡社, 東京, 255頁.

宮下和喜, 1989, 絶滅の生態学. 思索社, 東京, 201頁.

奥野良之助, 1989, さかな陸に上がる=魚から人間までの歴史=. 創元社, 大阪, 427頁.

## [1990]

河田雅圭, 1990, はじめての進化論. 講談社, 東京, 206頁.

金子史朗, 1990, ロストワールド・科学の旅=ギアナ高地からパンゲアへ=. 講談社, 東京, 279+vi頁.

ラウブ, D. M., 1986, ネメシス騒動=恐竜絶滅をめぐる物語と科学のあり方(渡辺政隆, 1990 訳). 平河出版, 東京, 316+iii頁.

松井孝典, 1990, 地球=誕生と進化の謎. 講談社, 東京, 222頁.

藤田至則, 1990, 日本列島の成立(新版)環太平洋運動. 築地書館, 東京, 259頁.

平野弘道, 1990, 史上最大の恐竜ウルトラサウルス. 講談社, 東京, 196頁.

松井孝爾, 1990, 図説・なぜヘビには足が無いか=恐竜からツチノコまで. 講談社, 東京, 205頁.

中尾佐助, 1990, 分類の発想=思考のルールをつくる=. 朝日新聞社, 東京, 331頁.

安田喜憲, 1990, 気候と文明の盛衰. 朝倉書店, 東京, 368頁.

カウフマン, L.・マロリー, K., 1986 編, 最後の絶滅=沈みゆく方舟を守る(宗 貞淑・永戸豊野, 1990 訳)=. 地人書館, 東京, 310頁.

平 朝彦, 1990, 日本列島の誕生. 岩波書店, 東京, 226頁.

フェイガン, B. M., 1987, アメリカの起源=人類の遙かな旅路(河合信和, 1990 訳). どうぶつ社, 東京, 349頁.

## [1991]

中原英臣・佐川 峻, 1991 a, 進化論が変わる=ダーウィンをゆるがす分子生物学=. 講談社, 東京, 248頁.

大野 乾, 1991, 大いなる仮説=DNAからのメッセージ=. 羊土社, 東京, 206頁.

小山慶太, 1991, 異貌の科学者. 丸善, 東京, 207頁.

チャップマン, C. R.・モリソン, D., 1989, コスミック・カタストロフィー(山崎和夫・川合葉子, 1991 訳). 吉岡書店, 京都, 376+xxviii頁.

今泉吉典, 1991, 分類から進化論へ. 平凡社, 東京, 286頁.

中原英臣・佐川峻, 1991 b, 利己的遺伝子とは何か=DNAはエゴイスト!. 講談社, 東京, 245頁.

## [1992]

クリシュタルカ, R., 1990, 恐竜と古生物の謎=化石が語る進化の面白い物語=(池田比佐子, 1992 訳). 心交社, 東京, 347頁.

赤澤 威・阪口 豊・富田幸光・山本紀夫, 1992 a 編, アメリカ大陸の自然誌 1, アメリカ大陸の誕生. 岩波書店, 東京, 267+5頁.

ミシャル, J., 1989, 恐竜のすべて(阪田由美子, 1992 訳). 創元社, 大阪, 182頁.

五十嵐享平・岡部 聡・村田真一, 1992, 絶滅動物の予言=生命誕生「35億年目の悲劇」を読む. 情報センター出版局, 東京, 446頁.

ゲラール=ヴァリ, Y., 1987, 化石の博物誌(南條郁子, 1992 訳). 創元社, 大阪, 206頁.

斎藤靖二, 1992, 日本列島の生い立ちを読む. 岩波書店, 東京, 147+6頁.

赤澤 威・阪口 豊・富田幸光・山本紀夫, 1992 b 編, アメリカ大陸の自然誌 2, 最初のアメリカ人. 岩波書店, 東京, 250+11頁.

宮城一男・高村毅一, 1992, 宮沢賢治と植物の世界. 築地書

- 館, 東京, 193 頁.
- 松永俊男, 1992, 博物学の欲望=リンネと時代精神=. 講談社, 東京, 196 頁.
- 井尻正二・秋山雅彦, 1992 編, 化石の世界. 大月書店, 東京, 214+4 頁.
- 松本秀雄, 1992, 日本人は何処から来たか=血液型遺伝子から解く=. 日本放送出版協会, 東京, 205 頁.
- 星野通平, 1992, 毒蛇の来た道=大規模海水準変動説=. 東海大学出版会, 東京, 150+2 頁.
- 池田清彦, 1992, 分類という思想. 新潮社, 東京, 228 頁.
- [1993]
- ウォード, P. D., 1992, メトセラの軌跡=生きた化石と大量絶滅=(瀬戸口烈司・原田憲一・大野照文, 1993 訳). 青土社, 東京, 352+vi 頁.
- 赤澤 威・阪口豊・富田幸光・山本紀夫, 1993 編, アメリカ大陸の自然誌 3, 新大陸文明の盛衰. 岩波書店, 東京, 257+6 頁.
- グールド, S. J., 1989, ワンダフル・ライフ=パージェス頁岩と生物進化の物語=(渡辺政隆, 1993 訳). 早川書房, 東京, 524 頁.
- コルバート, E. H., 1968, 恐竜の発見 (小島郁生・亀山龍樹, 1993 訳). 早川書房, 東京, 444 頁.
- ピュフェーター, E., 1991, 博物史の謎解き=化石論の進化物語=(土屋 進, 1993 訳). 心交社, 東京, 404 頁.
- 安富和男, 1993, ゴキブリ 3 億年の秘密=台所にいる「生きた化石」. 講談社, 東京, 201 頁.
- 福田芳生, 1993, 恐竜はなぜ恐竜になったか. 日経サイエンス社, 東京, 301 頁.
- 小出良幸, 1993, エベレストの頂上は昔, 海だった. PHP 研究所, 東京, 206 頁.
- 池谷仙之・山口寿之, 1993, 進化古生物学入門=甲殻類の進化を追う. 東京大学出版会, 東京, 148 頁.
- ベレシチャーギン, N. K., 1981, マンモス象を追って 60 年—古生物学者の回想(新堀友行・金光不二夫, 1993 訳). 東海大学出版会, 東京, 242 頁.
- 藤田至則・小室裕明・角田史雄・加藤碩一・西村敬一, 1993, 新しい地球観を探る. 愛智出版, 東京, 314 p.
- 多紀保彦, 1993, 魚が語る地球の歴史. 技報堂出版, 東京, 153 頁.
- 安田喜憲, 1993, 気候が文明を変える. 岩波書店, 東京, 116 頁.
- [1994]
- 金子隆一, 1994, 覇者・恐竜の進化戦略. 早川書房, 東京, 254 頁.
- 佐貫亦男, 1994, 恐竜たちと遊ぶ 1 時間. 朝日新聞社, 東京, 328 頁.
- 島村英紀・森谷武男, 1994, 北海道の地震. 北海道大学図書刊行会, 札幌, 224 頁.
- 香原志勢, 1994, 木のぼりの人類学. リヨン社, 東京, 270 頁.
- フェイガン, B. M., 1990, 現代人の起源論争=人類二度目の旅路(河合信和, 1994 訳). どうぶつ社, 東京, 341 頁.
- 多田富雄・中村雄二郎, 1994 編, 生命—その始まりの様式. 誠信書房, 東京, 376 頁.
- カリー, P., 1994, 恐竜ルネッサンス. 講談社, 東京, 326 頁.
- 長野 敬, 1994 a, 生命の起源論争. 講談社, 東京, 254 頁.
- 長野 敬, 1994 b, 進化論のらせん階段. 青土社, 東京, 357 頁.
- コルバート, E. H.・モラレス, M., 1991, 脊椎動物の進化(田隅本生, 1994 訳). 築地書館, 東京, 554 頁.
- 宮田 隆, 1994, 分子進化学への招待=DNA に秘められた生物の歴史. 講談社, 東京, 286 頁.
- [1995]
- 斎藤清明, 1995, メタセコイア=昭和天皇の愛した木. 中央公論社, 東京, 238 頁.
- 根路銘国昭, 1995, ウィルスで読み解く[人類史]. 徳間書店, 東京, 245 頁.
- 神谷敬郎, 1995, 骨の動物誌. 東京大学出版会, 東京, 177+ii 頁.
- 科学朝日, 1995 編, モンゴロイドの道. 朝日選書 523, 朝日新聞社, 東京, 232+vi 頁.
- 赤澤 威, 1995 編, アフリカからの旅立ち, モンゴロイドの地球. 東京大学出版会, 東京, 236 頁.
- 大塚柳太郎, 1995 編, 南太平洋との出会い, モンゴロイドの地球 2. 東京大学出版会, 東京, 210 頁.
- 百々幸雄, 1995 編, 日本人のなりたち, モンゴロイドの地球 3. 東京大学出版会, 東京, 232 頁.
- 瀬戸口烈司, 1995, 「人類の起源」大論争. 講談社, 東京, 268 頁.
- 佐伯 修, 1995, 上海自然科学研究所—科学者たちの日中戦争—. 宝島社, 東京, 295 頁.
- 米倉伸之, 1995 編, 極北の旅人, モンゴロイドの地球 4. 東京大学出版会, 東京, 216 頁.
- 大貫良夫, 1995 編, 最初のアメリカ人, モンゴロイドの地球 5. 東京大学出版会, 東京, 234 頁.
- グールド, S. J., 1977, ダーウィン以来(浦本昌紀・寺田 鴻, 1995 訳). 早川書房, 東京, 446 頁.
- トマ, H., 1994, 人類の起源(南條郁子, 1995 訳). 創元社, 大阪, 170 頁.
- ドーキンス, R., 1994, 遺伝子の川(垂水雄二, 1995 訳). 草思社, 東京, 238 頁.
- 馬渡峻輔, 1995 編, 動物の自然史〔現代分類学の多様な展開〕. 北海道大学図書刊行会, 札幌, 274 頁.
- [1996]
- リーキー, R., 1994, ヒトはいつから人間になったか(馬場悠男, 1996 訳). 草思社, 東京, 262 頁.
- 片山一道・五百部裕・中橋孝博・斎藤成也・土肥直美, 1996, 人間史をたどる=自然人類学入門=. 朝倉書店, 東京, 218 p.
- 井尻正二, 1996, 展開的弁証法と発展的弁証法. 地学団体研究会, 東京, 34 頁.
- ラウブ, D. M., 1991, 大絶滅—遺伝子が悪いのか運が悪いのか?(渡辺政隆, 1996 訳). 平河出版社, 東京, 253 頁.
- 尾本恵市, 1996, 分子人類学と日本人の起源. 装華房, 東京, 188 頁.
- 富田幸光, 1996, 恐竜と哺乳類. 岩波書店, 東京, 113 頁.
- 地学団体研究会全国運営委員会事務局, 1996 編, 地学団体研究会 50 年年表. 地学団体研究会, 東京, 107 頁.
- 中原英臣・佐川 峻, 1989, 1996, ウィルス進化論=ダーウィン進化論を超えて=. 早川書房, 東京, 255 頁.
- 浜田隆士・東 洋一・山崎信寿・福田芳生・佐貫亦男, 1996, 恐竜の動物学=恐竜学の近代化へ向けて=. 地人書館, 東京, 154 頁.

- 三木成夫, 1996, 人間生命の誕生. 築地書館, 東京, 241 頁.
- 大野 乾, 1996, 続大いなる仮説=5.4 億年前の進化のピックバン=. 羊土社, 東京, 222 頁.
- グールド, S. J., 1980, パンダの親指=進化論再考=(櫻町翠軒, 1996 訳). 早川書房, 東京, 287+277 頁.
- 宮城一男, 1996, 宮沢賢治=農民の地学者. 築地書館, 東京, 211 頁.
- シュリーヴ, J., 1995, ネアンデルタールの謎(名谷一郎, 1996 訳). 角川書店, 東京, 434 頁.
- [1997]
- ミコッド, R. E., 1995, なぜオスとメスがあるのか(池田清彦, 1997 訳). 新潮社, 東京, 318 頁.
- コリンズ, H.・ピンチ, T., 1994, 七つの科学事件ファイル=科学論争の顛末=(福岡伸一, 1997 訳). 化学同人, 京都, 229 頁.
- 中原英臣・佐川 峻, 1997, 生命進化の鍵はウィルスが握っていた. 河出書房新社, 東京, 208 頁.
- 多田富雄, 1997, 生命の意味論. 新潮社, 東京, 243 頁.
- 神奈川県立生命の星・地球博物館, 1997 編, 地球と生きもの 85 話=誕生から 46 億年. 有隣堂, 横浜, 207 頁.
- モリス, S. C., 1997, カンブリア紀の怪物たち=進化はなぜ大爆発したか=(松井孝典, 1997 訳), 講談社, 東京, 301 頁.
- 田代正之, 1997, 天草の地質と化石=人類以前の天草諸島(1)=. 南の風社, 高知, 265 頁.
- ストリンガー, C.・ギャンブル, C., 1993, ネアンデルタール人とは誰か(河合信和, 1997 訳). 朝日新聞社, 東京, 386+10 頁.
- 新妻昭夫, 1997, 種の起源をもとめて=ウォーレスの「マレー諸島」探検. 朝日新聞社, 東京, 403 頁.
- 諏訪兼位, 1997, 裂ける大地アフリカ大地溝帯の謎. 講談社, 東京, 256 頁.
- 田代正之, 1997, 天草諸島の形成と日本列島=人類以前の天草諸島(2)=. 南の風社, 高知, 225 頁.
- フォーリー, R., 1995, ホミニッド=ヒトになれなかった人類たち(金井塚務, 1997 訳). 大月書店, 東京, 272+20 頁.
- 松井孝典, 1997, 地球大異変=恐竜絶滅のメッセージ. WAC 株式会社, 東京, 267 頁.
- 植原和郎, 1997, 日本人の骨とルーツ. 角川書店, 東京, 292 頁.
- 池田清彦, 1997, さよならダーウィニズム=構造主義進化論講義=. 講談社, 東京, 242 頁.
- [1998]
- 丸山茂徳・磯崎行雄, 1998, 生命と地球の歴史. 岩波書店, 東京, 275 頁.
- 西田治文, 1998, 植物のたどってきた道. 日本放送出版協会, 東京, 212 頁.
- 都城秋穂, 1998, 科学革命とは何か. 岩波書店, 東京, 331+16 頁.